

クローズアップ NGO・NPO

特定非営利活動法人

はままつ子育てネットワークぴっぴ
理事長 原田 博子

巨大地震に備えてネットワークを生かす

協働事業から始まった活動

はままつ子育てネットワークぴっぴ（略して、ぴっぴ）は2004年に子育て中の親が中心となって発足した団体です。子育てに関わる課題を解決するために当事者視点で活動しています。2004年以前、「浜松市の子育て情報は、焼け野原状態だった」と市の職員が語ったほど情報がほとんど発信されず、集約もされていませんでした。核家族化で孤独な育児を行っている家庭が増えており、子育て中の親にとっては、交流をする場や悩みを解決してくれる相談の場などの情報を得るためのツールとして情報サイトが必要でした。浜松市はこの情報サイトを立ち上げるために公募をし、それに手をあげて採用されたのが当団体でした。「どうせ作るのであれば、行政情報も民間情報も一度に見ることができて、探しやすいサイトが欲しい！」というのが当事者である子育て中の親のニーズでした。「難しい行政用語を使わず、わかりやすいことばに書き換え、知りたい情報にすぐに行きつける」行政と地元の子育てNPOが協働作業を進めてできあがったのが“浜松市子育て情報サイトぴっぴ”です。当時、「言うはやすく行うは難し」と世間で言われてきた行政との協働事業ですが、子育て情報を当事者たちに届けたいという共通の目的が一致したことから始まりました。

その後、ぴっぴは2006年には法人化し、2009年から浜松市子育て情報センターの指定管理を行いながら、子育て情報サイトの運営や子育て講座、

母親の再就職支援のサポート、中間支援団体として子育て支援者の交流を促すなどの事業を行っています。これまで他団体や大学と連携して子育てや仕事と家庭の両立に関わる事業や調査なども行ってきましたが、今は子どもを守る防災事業に力をいれています。

乳幼児のいる家庭は災害には弱い？

静岡県では東海大地震が来ると言われて30年余り。現在では、南海トラフ地震が30年以内に起こる確率は60～70%と言われています。県内では東日本大震災が起こる以前からも防災訓練はかなり行われており、防災ずきんは常時、学校や幼稚園で個別に用意されていました。しかし、防災意識が強い地域でありながら、乳幼児のいる家庭や障害者は防災訓練にはなかなか出られず取り残されがちです。

ぴっぴでは、出られない人たちに向けて、なんとか防災について知識を得る機会を持ってないか、防災事業を深めたいと考え、2006年に社会福祉協議会、災害ボランティアコーディネーター、障がいを持つ子どもの親の会、アレルギーの会などと連携して、それぞれの経験や知恵をもとに「子どもを守る防災ワークブック」という冊子を制作しました。とかく防災は、地震のメカニズムから始まり、なんだか小難しくて関心が持てないという意見もありがちです。キャンプなどアウトドアでも生かせる知恵や知識を取り入れながら、楽しんで防災を考える講座を企画しました。

防災への関心を高めるには

「子どもを守る防災ワークブック」を参考にしながらの講座を、Webサイトで公開したことで、徐々に育児サークルや子育て団体、保育園や幼稚園などを中心に広がり、全国から問い合わせや依頼が多くなっていきました。子どもに使えるものは高齢者も同じことと自治会や高齢者グループからも、町ぐるみでと、商工会や青年会議所などからも依頼が来るようになりました。ただし、いつ来るかわからない災害に関心を維持するのは難しいものです。継続的に災害への関心を持ってもらうにはどうすればよいのかと日頃から防災に関わる団体の方々と意見交換をしていた矢先、2011年3月、東日本大震災が起きました。その後は、津波被害が映像でも何度も流れ衝撃的だったことが大きく影響したのか、瞬間に防災への意識は高まりました。

静岡県は海に面した地域も多く、第4次地震被害想定では津波が数十メートルと言われているところもあります。浜松市も海に面した区域では防災への意識の高さは相当なものです。阪神大震災の時のような建物倒壊による被害とは違い、東日本大震災の津波は大きく災害への概念を変えました。これを機に被災地を訪ね、避難生活を送った人や行政、災害ボランティア団体にヒアリングを重ね、「子どもを守る防災ワークブック」を更新しました。今では、自然災害を防ぐには限界があるため、災害を最小限にとどめる減災という考え

方に移行してきました。ぴっぴもその概念のもと、「ぴっぴ家族の減災BOOK」という形で完成させました。

防災事業の課題

浜松市にはブラジル人をはじめ外国人が2万5,000人ほど住んでいます。在日外国人の中には、地震をほとんど経験したことがないという人たちもいるので、災害への備えを啓発しようと浜松にある外国人支援団体も防災や救急に関する講座を行っています。昨年、ぴっぴは浜松市外国人学習支援センターから防災ワークショップの依頼を受けました。市販の防災用品もよいのですが、緊急時に身近なもので代用するという知恵を育むことを目的とした内容です。参加者たちはふだんから日本人とのコミュニケーションがある人たちなので、防災の理解も高かったようでした。外国人といっても、市内にはさまざまな国の出身者がおり、生活習慣も言語も違う人々がいます。避難所生活をせざるを得なくなった時にトラブルにならないような対応も必要となります。ふだんからいかに相互で助け合えるような関係づくりをしていくかが、数ある防災事業の課題の中でも「多文化共生のまち」と言われるがゆえに浮上してきた課題で、多くの方々とじっくり取り組んでいきたいと思います。



浜松市外国人学習支援センター 防災ワークショップ「カッパづくり」



防災ワークショップ「ぴっぴちゃんを救え」